
『西南学院百年史』編纂の 過程で判明した史実

学院史資料センター事務室

『西南学院百年史』（以下『百年史』）の編纂・監修作業においては、特に以下の3点に留意した。

- ①『西南学院七十年史』（以下『七十年史』）の記述に関しても、可能な限り1次資料による再検証を行った。
- ②西南学院に所蔵されていない国内外の資料を収集するために、国内においては主に国立公文書館などから、国外においては主に米国南部バプテスト歴史古文書館（以下「米国歴史古文書館」）などから関連資料（コピー）を収集した。福岡市や福岡県の関係機関にも問い合わせたが、空襲で建物が焼失し、戦前・戦中の資料はほとんど残っていないかった。

以上の結果、『七十年史』には記述されていなかった新しい史実や新しい写真、資料が見つかった。また、『七十年史』の記述で、明らかな間違いや誤りではないかと思われる記述も確認できた。これらの主だった事項を表にまとめ、時系列で後掲した。

■ 2次資料を典拠にすることの危うさ

『七十年史』では、2次資料を典拠にした記述が多くあった。その典型が、遙か以前の思い出の記または思い出話を典拠としたものである。その思い出が1次資料をもとにしたものであれば問題ないのであるが、多くが、個人の「記憶」をもとにしているので、記憶違いによって間違った内容となっているケースがあった。その主なケースを以下に紹介する。

1. 日曜日問題について

『七十年史』では、1967年7月発行の『紺碧－西南体育会の歩み』（創刊号）の硬式野球部の記述（執筆者不明）を引用して書かれている。同『紺碧』には、1927年の九州高専試合で日曜日に長崎高商と試合を行って勝ったが、その日が日曜日で、部員全員が停学の処分を受けた、とある。『七十年史』では、同文引用の後に「このよう

に、1927(昭和2)年は、福岡の学生スポーツ界において、西南の大躍進の年であった。その反面、大躍進の年は、挫折の年でもあった」と記述している。

西日本新聞社の協力を得て、1927年の野球部の試合を総点検したが、該当する試合や部員が停学になったという記事はなかった。同年の学院理事会の記録やドージャーの日記にも「部員の停学」などといった記述はなかった。ただ、翌1928年7月24日の新聞記事に、長崎高商と試合を行って勝ったが、日曜日に試合をした理由で院長（ドージャー）が野球部の解散を命じた、とあった。同月23日のドージャーの日記にも「彼ら（野球部員）が不従順であったため、チームを解散させた。校則を破ったため、試合を今後することを禁止した」とあった。『百年史』では、そのように記述しなおした。

2. 校歌の誕生

校歌の誕生については、作詞をした中学部教員水町義夫（後の第4代院長）のいくつかの追想が残っており、それを元に『七十年史』は記述されている。最も古い追想は1954年10月発行の『西南母校だより』第1号に記載がある。問題は、水町の追想に、1921年3月10日の中学部の第1回卒業式で披露された、とあることである。この記述は、他の追想も同様である。同卒業式の式次第（プログラム）や新聞記事を確認したが、どこにも校歌が披露された（歌われた）形跡はなかった。また、同年4月の高等学部開部式や入学式においても同様であった。翌年（1922年）第2回の中学部卒業式と高等学部入学式の式次第には「校歌斉唱」が記載されている。

また、作曲は、同追想によれば、1921年1月にできあがったとある。当時、上野音楽学校の学生で福岡バプテスト教会員の不破ひさ子という女性を通じて同学校教授の島崎赤太郎が作曲した。同女史の履歴を調査したところ、彼女が同学校に入学したのは1921年4月であった。以上を総合的に勘案すると、校歌の誕生（披露）はこれまでの1921年3月よりも後であった可能性が高い。

■ 新資料収集の成果

『七十年史』の致命的とも言える欠陥は、英文資料（特に宣教師文書）の1次資料の収集・活用がほとんどなされなかったことである。『七十年史』編纂時、ドージャーをはじめとする宣教師の日記、手紙などは資料としてほとんど学院に存在していなかった（1928年のドージャーの日記は所蔵されていた）。唯一、『七十年史』の編纂で利用されたのは、モード・B.ドージャー（以下「モード」）が晩年（1962年）に完成させた「SEINAN GAKUIN」（英文）とドージャーの死から1年後に刊行された

『ドージャー院長の面影』所載の9日分の日記（和文）である。前者は、ドージャー夫妻が来日した1906年からドージャーが西南を去る1929年までの西南学院に関する歴史をドージャーの日記や手紙などを織り込みながらまとめたものである。いずれも2次資料である。冒頭で記したように、『百年史』編纂に当たっては、極力、米国歴史古文書館から取り寄せた1次資料をその典拠とした。

その他にも冒頭で触れたように、これまで学院にはなかった国立公文書館所蔵の資料、特に戦前・戦中の諸申請資料や認可書によって、いくつかの新事実が発見された。新資料の発掘によって、明らかになった主な史実を以下に紹介する。

1. 校名と校章の発案者

校名と校章の発案者については、これまで不明で、『七十年史』には発案者名の記述はなかった。しかし、米国歴史古文書館から入手したドージャーの「西南学院創立15周年のメッセージ」（1931）の中に、「校名はロウ、校章は私（ドージャー）が発案した」旨の記載があり、『百年史』ではそのように記述した。

2. 学院創立時のドージャーとモードの日記

学院創立年である1916年のドージャーおよびモードの日記が、米国歴史古文書館に保管されていることが分かり、取り寄せた。2人の日記には開校式の状況や念願だった学校開設を喜ぶ2人の気持ちが記されていた。『百年史』では、これらを記述することで、開校式の項に厚みを持たせることができた。

3. 日記の間違った取扱いの是正

1927年は高等学部の学生が教授会に様々な要求をしてストライキを行った前年で、日曜日問題や神学科長の辞任、文商科長の辞表提出などドージャー院長にとっても気の休まることのない年であった。その年の2月13日のドージャーの日記に「天の父よ、これが現在の状勢であります。…もし西南があなたの育成し給うところのものならば、我らの目、速やかに開いてこの校を閉鎖せしめ給え…」とあるが、中略が多く全文が記載されていない。この部分は、『七十年史』をはじめ、学院で刊行された多くの冊子で、日曜日問題など多くの難題をかかえた学院の渦中であって、その責任者（院長）としての苦悩を記したものと解され、引用されて来た。この日記も米国歴史古文書館から取り寄せた。全文を検証した結果、これは、学内の問題ではなく、米国南部バプテスト連盟からの財政的援助が少ないことに対するドージャーの苦悩が書かれていたことが判明した。

4. ドージャーの遺言「Tell Seinan Gakuin to be true to Christ」の典拠

学院の建学の精神が“Seinan, Be True to Christ.”（西南よ、キリストに忠実なれ）であり、それは、ドージャーの遺言であったということは言をまたない。このことは、

ドージャーの死後、多くの冊子等で取り上げられた。『七十年史』では、ドージャーの死の10日後に発行された教会機関紙『聖戦』（1933.6.10）の記事を引用している。その中で、ドージャーがモードに「西南学院に、くれぐれもキリストに忠実なれと伝えよ」と遺言した旨が記述されている。

しかし、これも『聖戦』の記述者がドージャーの遺言を直接聞いたわけではないので、いわば2次資料である。ただ、ドージャーの死から10日後の発行なので信ぴょう性は高い。『百年史』編纂に当たっては、モードがそのことを直接書き残した資料がないか調査したところ、モードがドージャーの死の5日後（6月5日）にミッションボードに書き送った手紙が米国歴史古文書館に保管されていた。手紙には、間違いなく「The last request he made to the school that he loved more than his own life was, "Tell Seinan Gakuin to be true to Christ"」と記されていた。

5. 軍事体制下の寄附行為

1938年9月、学院は西南学院商業学校（夜間）の設置を主たる目的として、文部省に申請を行った。国立公文書館から入手したその際の私立西南学院財団寄附行為第1条には「教育勅語ノ御趣旨ヲ奉體シ」という文言が盛り込まれていた。また、第2条では「西南学院ノ教育ハ永久ニ基督教主義ニシテ」から「永久ニ」の文言が削除されていた。同じく国立公文書館から入手した1941年10月7日付の西南保母学院の財団法人設立許可申請書によると、財団法人西南保母学院寄附行為第1条から「基督教ノ主義ニ基キ」の文言が削除されていた。

以上の寄附行為の文言修正は、文部省の指示によるものなのか、学院が主体的に行ったのかは不明である。これらは、『七十年史』には記述がなかった事項であり、軍事体制下における寄附行為の変遷を物語る貴重な資料となった。

『西南学院百年史』編纂で判明した主な史実一覧

No.	区別	項目	項目の年月	内 容
1	新規	S.S. コレア号写真	1906	『七十年史』にはなかった写真。あわせてサンフランシスコから出港したことが判明 (Annual 1907)。
2	新規	初代院長條猪之彦のバプテスマ	1909.2.14	初代院長條猪之彦について、『七十年史』では「バプテストの会員であったと考えられる」と記述している (上 p.268) が、その後の調査で、1909年2月14日にアメリカンバプテストの George Washington Hill (1861-1937) 宣教師からバプテスマを受けており (京都バプテスト教会会員原簿)、北部バプテストの教会会員であった。
3	新規	舞鶴幼稚園より以前の宣教団の幼稚園	1912	舞鶴幼稚園の前身となる幼稚園がバプテスト宣教団によって、博多区千代に開設されていた。責任者として G.H. ミルズ、働き手として渡辺シマを招聘。(Annual 1913)
4	新規	創立時の新入生・教職員写真	1916	『七十年史』所載 (上 p.280) の写真は、ドージャーの日記により、1916年4月17日に撮影されたことが判明。
5	新規	学院創立時の募集人員は105人	1916.3.3	1916年3月3日の福岡日日新聞の記事が見つかり、それによると募集人員は105人となっている。
6	修正	創立当時の教職員生徒	1916.4.11	『七十年史』では「教師9名」となっている (上 p.280) が、正確には「教職員9人」。職員 (書記・会計の河野吉道が含まれている)
7	新規	開校時の職員河野吉道	1916.4.11	『七十年史』所載 (上 p.279) の職員で書記・会計の河野吉道は河野博範の父親である。(『河野博範先生伝』2018.9 中山昌弘 p.2)
8	修正	開校式順序	1916.4.11	『七十年史』 (上 p.281) では「聖書朗読：下瀬加守、祈祷：C.K. ドージャー」となっているが、実際は「聖書朗読：C.K. ドージャー、祈祷：下瀬加守」(4.12 九州日報、福岡日日の新聞記事)
9	新規	開校式のエピソード(※)	1916.4.11	婦人宣教師手作りの箱入りスポンジケーキが配られ、ケーキにはピンクの文字で「西南学院」と描かれていた。(当日のドージャーとモードの日記。Gleanings 22巻4号、1916.5)
10	新規	補欠生徒15人を募集	1916.4.5	当日の九州日報に補欠生徒15人を募集する広告あり。結果は不明。
11	修正	学院本館平面図	1919	『七十年史』の平面図 (上 p.296) は1930年代後半のもの。完成当時、電話交換室 (1923年設置) や奉安所 (完成は1937年?) はなかった。『百年史』では設計図を基に作成。
12	修正	校歌完成の時期(※)	1921.3	『七十年史』では、校歌を中学部第1回卒業式、高等学部第1回入学式で披露とある (上 p.306~308) が、両方の式プログラムや新聞記事にも校歌斉唱の記録なし。
13	修正	不破ひさ子の経歴(※)	1921	『七十年史』では、島崎赤太郎に校歌の作曲を依頼した不破ひさ子という女性は、当時 (1920) 上野音楽学校の学生であったとある (上 p.311) が、同女史は、1921年4月に同学校に入学している。(『基督教報』第603号1921.5.4)
14	修正	高等学部の入学式	1921.4.12	『七十年史』では、「4月1、2日」とある (上 p.571) が、「4月12日」が正しい。
15	新規	高等学部の入学定員	1921~1923	『七十年史』では、記述がない。新聞記事でドージャーが「文科50人、商科50人を予定している」との記録があるのみであったが、1923年の「高等学部便覧」にその旨の記載があった。

No.	区別	項目	項目の年月	内容
16	修正	高等学部本館（校舎）平面図	1922.4.1	『七十年史』所載の平面図（上 p.583）は、完成時のものではない。後付けの教室2室がある。
17	新規	電話設置	1923	1923年8月22日熊本通信局長認可。（認可書）
18	新規	故職員生徒追悼会	1925.11.27	詳細は不明であるが、1925（大正14）年11月27日に故職員生徒追悼会を行った資料「故職員生徒追悼会記録」（1926.11）がある。対象は教職員4人、生徒15人である。父兄からのお礼の手紙に「英霊」という言葉があり、戦死者の追悼会と思われる。
19	修正	日記の解釈（※）	1927.2.13	「天の父よ、これが現在の情勢で…」は、これまでドージャーが日曜日問題のことを憂えて書いたと解釈されていたが（上 p.602）、日記の全文を検証した結果、財政問題について書いたものであることが判明。
20	新規	高等学部学生が教授会に宛てた建議書	1928.2.9	この18項目から成る建議書（写し）は、以前から西南学院に保管されていたと思われるが、『七十年史』での記述はない。『百年史』では、18項目全てを掲載。
21	修正	日曜日問題（野球部解散）（※）	1928.7.24	『七十年史』（上 p.594）では、硬式野球部の記述を引用して「1927年の九州高専試合で日曜日に長崎高商と試合を行って勝ったが、その日が日曜日で、全員停学の処分を受けた」（『紺碧－西南体育会の歩み』創刊号1967.7）とあるが、調査の結果、「1928年に長崎高商と日曜日に試合を行い、7月に野球部の解散が命じられた」というのが正しい。
22	修正	ドージャーの日記の日付	1929	『七十年史』では、1929年6月20日のドージャーの日記とされているが（上 p.607）、実物の確認により、6月19日であることが判明。内容もかなり脚色されていたので、『百年史』では事実に応じて記述した。
23	修正	日曜日問題	1930.3.14	『七十年史』（上 p.610）の「1930（昭和5）年3月1日の同委員会」は、「1930（昭和5）年3月14日の同委員会」が正しい。（同委員会記録）
24	新規	SWの校章（※）	1931	不明であったが、ドージャーが考案したことが判明。（C.K.ドージャー「学院創立15周年記念式典講演」（英文））。
25	新規	「西南学院」の名称（※）	1931	『七十年史』に「1教師の献言に基づいたもの」とある（上 p.272）が、J.H.ロウのアイデアだった（C.K.ドージャー「学院創立15周年記念式典講演」（英文））。
26	修正	リンドバーグ夫妻来福	1931.9.18	『七十年史』（上 p.365）の写真「リンドバーグ夫妻、訪問飛行の途次来福」のキャプションで、「福岡市庁舎前で」とあるが、「福岡工業試験場前」が正しい。日付も9月17日ではなく9月18日。（『写真集 福岡100年』西日本新聞社1985.11他新聞記事）
27	修正	舞鶴、福岡教会に移管	1932.12.17	『七十年史』（上 p.383）では、「1933（昭和8）年、…福岡バプテスト教会に、その経営を移管することになった」とあるが、「聖戦」33号（1933.2.10）によれば、「1932.12.17に協同委員より教会へ園経営を委ねられた」とある。
28	新規	C.K.ドージャー遺言の新資料（※）	1933.6.5	ドージャーの遺言を直接聞いたモードの資料はなかったが、1933年6月5日に、ドージャーの死をミッションボードに知らせる手紙を取り寄せることができた。その中にドージャーの遺言が書かれていた。

No.	区別	項目	項目の年月	内 容
29	新規	全日本大学高専英語弁論大会	1934.11.23	『七十年史』(上 p.653) では、「1938(昭和13)年、第5回まで記録が残されている」とあるが、1940(昭和15)年11月22日の第7回まで開催。(第6回1939年11月25日、第7回1940年11月22日)(『西南新聞』38号.1940.2.5他)
30	新規	高等学部学帽の統一	1935.4.1	『七十年史』には記載がない。高等学部の学帽が統一されたものになった(『西南新聞』8号、1934.11.28)
31	修正	高等学部興風会	1937.10.1	『七十年史』(上 p.659) では、「会の事業としては、①毎日1回」となっているが、「会の事業としては、①毎月1回」が正しい。(『昭和15年度西南学院一覧』)
32	修正	E.B.ドージャーの御製、JOLK放送日	1938.1.8	E.B.ドージャーの御製は、『七十年史』年表では、1938年1月9日となっているが、本文(上 p.432)や中学部学友会雑誌では1938年1月8日となっており、1月8日が正しい。
33	修正	学院出身者戦没者追悼記念式	1939.10.20	『七十年史』年表では、1939年10月22日開催と記述されているが、本文(上 p.428)および追悼記念式式次第では10月20日開催となっており、10月20日が正しい。
34	新規	戦時中と戦後の寄附行為の変更	1939.4.1 1948.1	1939.4の寄附行為変更で、第1条に「教育勸語の御趣旨を奉戴し」という文言が挿入されたが、戦後、1948年1月に文部省に提出した寄附行為変更によって、この文言を削除した。
35	新規	「天皇御親閲」参加	1939.5.22	『七十年史』では「中学部からも、生徒代表10名、職員3名が参加した」との記述があるのみだが(上 p.436)、高等学部からも参加(生徒代表10人、引率4人)。その他に学院代表として、水町院長が参加している。引率教員(中)佐々木、板倉、松永、(高)杉本、松本、藤井、岩橋、とある。(1939.5.21『大阪朝日・福岡版』松井スクラップメモより)
36	新規	私立西南学院財団寄附行為の修正認可(※)	1939.1.17	1939年4月に設置された西南学院商業学校(夜間)の記述中、『七十年史』では寄附行為の変更については触れていない(上 p.558～)。国立公文書館所蔵の寄附行為変更認可書確認により、申請時の私立西南学院財団寄附行為では第1条に「教育勸語ノ御趣旨ヲ奉戴シ」という文言が追加され、第2条の「西南学院ノ教育ハ永久ニ基督教主義ニシテ…」の「永久ニ」が削除された事実が判明した。
37	修正	日本バプテスト基督教団	1940.1.4～ 1.5	『七十年史』年表1940年に「東部及び西部両組合合同し、日本バプテスト教会結成(1・5)」(下 p.1375)とあるのは「東部及び西部両組合合同し、日本バプテスト基督教団結成(1・4-1・5)」が正しい。
38	新規	第2回追悼記念式実施年月日	1940.10.18	『七十年史』では「追悼記念式は、1940(昭和15)年にも挙行されたようであるが、現在のところ不明となっている」とある(上 p.429)が、中学部便り『百道』第23号(1940.12.20)には「戦没者慰霊祭 学院関係最近戦没者六氏ノ慰霊祭行ナハル(一〇、一八)」とあることが判明した。
39	新規	財団法人西南保母学院寄附行為の修正(※)	1941.10.7	『七十年史』では、1942年3月13日に財団法人西南保母学院の認可が下りたとの記述しかない(上 p.463)が、国立公文書館所蔵の申請書確認により、申請時の保母学院寄附行為第1条から「基督教ノ主義ニ基キ」という文言が削除された事実が判明した。

No.	区別	項目	項目の年月	内 容
40	修正	新校章の制定	1942.11.3	『七十年史』では「新しい校章は、精神・肉体・気迫」を象徴する三角形を基底とし」とある（上 p.481）が、出典が不明。『西南学院新聞』52号、55号、『西南学院中学校三十年の歩み』では、いずれも「学院精神を象徴する信・望・愛の正三角形を基底とし」となっている。『百年史』では、そのように記述した。
41	修正	新校章の制定と使用	1942.9	新校章は、「1942年11月3日の明治節から使用された」とある（上 p.481）が、『西南学院新聞』第44号（1941.2.3）によれば、1942年9月に制定され、中学・商業は1943年1月8日から、高等学部は2月11日から使用した、とあり、『百年史』ではそのように記述した。
42	修正	高等学部の改組存続	1944.1.28	『七十年史』では、高等学部改組存続が1943年2月1日に許可されたとの記述がある（上 p.489 年表下 p.1378）が、三校統合は、1943年10月に文部省から勧告され、翌1944年1月28日に文部省から存続が許可されている（許可書を国立公文書館から入手）ことから、1944年1月28日が正しい。
43	修正	奉安殿の完成	1944.7	『七十年史』（上 p.488）では「いつ完成したのか、正確な記録は残っていない」として完成年月は記載していない。しかし、同年表では1944年7月となっている。『百年史』では、「学院沿革簿」に「1944年7月完成」との記載があることから、そのように記載した。
44	修正	学院における戦後の復興策	1945.11.24	『七十年史』では「その最初の試みとして、1945(昭和20)年11月20日に開かれた理事会」（下 p.15）とあるが、11月20日には理事会は開催されておらず、この件は、11月24日と翌年3月22日に協議されている（理事会記録）。
45	修正	E.B.ドージャー来校時のコメント	1946.11.22	『七十年史』（下 p.23）には「新設事業のため、400名位の宣教師の派遣も可能」とあるが、「新設事業のため、40人位の」が正しい。（1946.11.22 理事会記録）
46	修正	御真影の焼却	1946.2.19	『七十年史』年表（下 p.1383）では「2・19 御真影焼却決定」とあるが、同年3月22日の理事会記録には「2月19日 奉安中ノ御真影ハ焼却セリ」とあり、そのとおり記述した。この文言だけでは、学院で焼却したのか、県に供出して学外で焼却されたのかは定かではない。
47	新規	九州経済専門学校の発足と再分離	1944 1947	戦時中の三校統合問題については、『七十年史』では西南学院高等学部の動きのみの記述となっている（上 p.680）が、福岡高等商業学校（現福岡大）と九州専門学校（現九州国際大）は、1944年に統合して九州経済専門学校となり、戦後の1947年に再び分離して福岡経済専門学校、戸畑専門学校となった。
48	修正	大学設立準備委員会の発足	1947.2.8	『七十年史』年表では「5.11 西南学院大学設立準備委員会発足」とある（下 p.1384）が、5月11日は大学設置趣意書が配布された日である。同年2月8日の理事会で委員会を作ることが決まった。『百年史』では、そのように記述した。
49	新規	第1回ギャロット杯英語弁論大会開催	1950.9.23	『七十年史』（下 p.1124）では「1950年開催」とのみ記載されているが、同年9月23日に開催されたことが判明（豊田佳日子氏資料による）。

No.	区別	項目	項目の年月	内 容
50	修正	内地留学に関する研究費	1951.4.19	『七十年史』では、1951年4月19日に制定施行された内地留学に関する規程施行細則第5条で「研究費は300万円とし、…」となっている（下 p.905）が、同細則では「300円」となっており、「300円」が正しい。
51	新規	寄附行為改正	1952.2 1956.9	西南学院は1952年2月に学校法人となったが、その際に文部省に出した寄附行為の第1条後段には「前項の基督教とはその教義の標準を旧新約聖書に置くものとする」とした。この条文は、1956年9月に文部省に出した寄附行為では「前項の基督教とはその教義の標準を新約聖書に置くものとする」と変更された。（理由は不明で調査中）
52	修正	郭沫若氏の講演	1955.12.17	『七十年史』年表では12月16日に講演したとなっている（下 p.1396）が、本文（下 p.1087）および『西南学院大学新聞』（120号）1955.12.20）では、16日に来福し17日に本学で講演したと記述されている。『百年史』では、そのように記述した。
53	修正	早緑子供の園第2代園長	1960.4	『七十年史』では、1960年3月に初代園長の福永津義退任後、同年4月からE.B.ドージャーが第2代同園長に就任したとなっている（下 p.423）。その後、まもなく休暇帰米したため、帰米中は三善敏夫が園長事務取扱となり、翌年（1961）1月に第3代園長にM.E.ドージャー（E.B.ドージャー夫人）が就任したとなっている（下 p.424）。人事課のE.B.ドージャーの人事記録および早緑子供の園園長の記録では、E.B.ドージャーが第2代園長に就任したという記録はない。過去の早緑関係の年史も同様である。資料としては、福永津義退任とE.B.ドージャー園長就任の挨拶状があるのみである。三善敏夫の園長事務取扱の正式な記録もない。M.E.ドージャー（E.B.ドージャー夫人）の早緑子供の園園長就任については、理事会記録と月報記録に1960年5月1日就任の記録がある。以上の結果、『百年史』では、第2代園長（1960.5.1～）をM.E.ドージャーとした。
54	修正	日米安保反対闘争の一環で学生3日間スト	1960.6.20 ～22	『七十年史』では年表のみ「1960.6.20～6.22 大学3日間スト」と記載されている（下 p.1401）が、本文には記述がないので、内容が不明である。実際は、日米安保反対闘争の一環として行われた。『百年史』では年表にそのように記述。詳細は不明。
55	修正	「SEINAN GAKUIN」の執筆	1962	『七十年史』年表では1963年頃となっている（下 p.1406）が、「西南同窓会報」（1962.7）には「編集を終了。8月中にプリントされる由」とあり、1962年に作成されたと推測できるが、その後、製本・刊行されたという記録はなく、『七十年史』の根拠が不明。
56	新規	大学入試での学外施設の借用	1976～1978	『七十年史』では、最初に学外の施設を借りて行った入試については触れている（1967.2 下 p.970）が、1976～1978の3年間についても学外の施設を借用して実施したことは触れていない。『百年史』では記述した。
57	新規	大学課長会議規程	1967.4	『七十年史』では、年表に「1967年4月1日に大学課長会議規程制定」とある（下 p.1411）が、それまで、課長会議に関する規程は大学規程内に規定されていたことが分かった。

No.	区別	項 目	項目の年月	内 容
58	修正	関東学院大学神学部と青山学院大学神学科廃止年	1973 1977	『七十年史』では、関東学院大学神学部は1971年3月31日に廃止、青山学院大学文学部神学科は1975年11月19日に廃止、となっているが（下 p.671）が、それぞれ、1973年3月31日、1977年3月31日が正しい。（『関東学院大学のあゆみ』『青山学院大学五十年史』）
59	修正	国際交流・留学生別科事務室設置年	1973.4	『七十年史』に「1972(昭和47)年4月1日、国際交流・留学生別科事務室が誕生し」とある（下 p.733）のは「1973(昭和48)年4月1日、…」が正しい（『西南学院大学広報』No.24、No.27）。

注1. 誤植など軽微な修正は省略した。

注2. 「項目」中の（※）は、本文で解説したことを示す。

注3. 「区別」の項の「修正」は『七十年史』の記述を修正したもの、「新規」は『百年史』編纂過程で新たに見つかった史実を示す。

注4. ページ数の前に「上」「下」とあるのは、『七十年史』の「上巻」「下巻」を示す。